天皇訪米のテレビ取材

NHK 制作技術局 神 藤 賢 次
坂 本 耕 一

これは日本の放送界で初めて小型カメラと小型 VTR でプールニュース取材を行った際のあらま
しと、今後の小型取材機器への期待をまとめてみたものである。

1. 最初の訪問地ウィリアムズバーグにて

ワシントンの南、バージニア州、アメリカ開拓時代の
たたずまいを再現した観光の町ウィリアムズバーグの朝
は霧が美しい季節であった。わずか 200 年の歴史しかも
たない米国民が郷愁を塗りこめたような米国版明治村
の虚構の中で、取材スタッフ一同いささか時代錯誤の混
乱に見舞われながら、小型ビデオによる最初の仕事にと
りかかった。

天皇特別機が空港に到着する模様は、生中継で日本へ
衛星伝送されることになっていて、小型ビデオでは天皇
車が町を通過して宿舎に入るところを取材することにし
て、予備のカメラ、VTR も動員して3台を配置した。
ところが、のっけからシークレットサービスの厳重な警
備による取材制限が待ちかまえていた。天皇車の通るコ
ースは一切秘密、あらかじめきめられた取材席も彼らの
警備に不適な場所になると報道陣を締めだし、雲をつく
ような大男たちが天皇のまわりに立ちほだかり、カメラ
の前を右往左往する。天皇が訪問する数週間前のわずか
半月の間に、2度も大統領暗殺未遂事件が起きたような
異常な世情の米国ならではの警備ぶりが展開されたので
ある。

こうした状況の中で配置についた3クルーは、思いど
おりの画がとれるかどうか自信をなくしかけていた。一
方、空港ロビーの一隅を借りてセッティングした編集・
送出装置のタイムベースコレクターの具合が悪く、担当
者は画が送れるかどうかやきもきしていた。

日本でまだ本番運用されていない小型ビデオをいきな
り米国へ持ちこんで、それ本番というのだから、みんな
不安だったのである。

……こうして1回目の小型ビデオによる画が日本中の

家庭のブラウン管にうつったのである。

2. 日本の ENG はドキドキで始められた

昨年秋（9月30日～10月13日）の天皇訪米取材に、
NHK、NTV、TBS、フジテレビ、NET の5社カメラ取
材部長会が、従来の16ミリフィルムに加えて、ハンデ
ィーカメラとVTR（小型ビデオ）をジャパンプール取
材班で使うことを決めたのは、天皇ご出発のわずか2ヵ
月前の7月下旬であった。

その当時 ENG の有力な武器として、米国のテレビ局
で使われはじめていた小型ビデオの存在は、理念上では
強く注目されていた。また日本の各メーカーが、新しい
市場を目ざして研究、開発、製作にしのぎをけずって
いたものの、製品はまだ試作機の段階といえるものであ
った。機動性に富んだフィルムカメラを駆使しているニュ
ースカメラマンの意に沿うような性能や操作性が得られ
ず、実用化にはいま一步とみられていた。それにこの新
しいシステムを導入するには、多額の設備投資と運用ス
タッフの養成や配置が必要で、まだ時間がかかるだろう
というのが大方の意見であった。

それにもかかわらずニュース現場では、性急に小型ビ
デオによる取材のメリットに魅せられ、なんとかして使
ってみようという衝動にかられていたのである。それは
激しい競争関係で成り立っているマスコミの自己主張で
あり、取材合戦に勝とうとするニュースマンの誇り高き
欲求であった。フィルムに絶対不可欠な現像処理の時間
（通常20分から30分かかる）がいらなくなり、原稿の
運搬に要する時間も、たとえば取材現場から FPU を使
って伝送すればはぶける。それだけより早く伝えること
ができるという、ニュースにとって大きなメリットが期
待できる小型ビデオを使ってやろうという気になるのは
当然であろう。

ところで、カメラ取材部長会は小型ビデオの使用を決

“Electronic News Gathering of Royal Visit to the United States”
by Kenji Kanto and Kohichi Sakamoto (NHK, Tokyo)

めたものの未経験の分野であり、信頼できる機材もないので苦慮していた。わずかにその年の7月に行われた沖縄海洋博の開会式で、NTVが東芝ハンディーカメラ(CK-38)と、ソニーUマチックVTRを使って取材し、放送した貴重な経験が報告された。しかし、成果をあげた蔭には、機材のトラブルが多かったということもあって、本番イッパツにすべてを決しなければならぬニュースに使う不安は拭いきれぬまま使用を決めたのである。

そこでフィルムカメラも同時にまわすことでカバーするなど、取材スタッフに提言されたりもした。

3. 多くなったニュースのプール取材

天皇訪米のテレビ取材では、プール取材と各社の独自のユニ取材とによる2段階構えの方法がとられた。海外からの衛星による映像伝送の現状は、回線が少ないためにいつも伝送の順番が各社間で問題になり、共通の映像を優先して伝送する方法が各社の話合いで多く用いられるようになっている。それと取材先の人数制限や無用な重複を避けるなどの都合で、プール取材するケースも国の内外で増えてきており、今回も天皇が訪問された場所はホワイトハウスをはじめ取材制限の厳しいところがほとんどで、どうしてもプール取材に頼らねばならなかったのである。

しかし、プール取材にすべてを委ねることは、表現の自由と競争関係で成り立っている報道の本意ではなく、止むを得ずとした手段であるから、可能なかぎり各社の独自性を発揮するために、ユニ取材のスタッフも別に派遣された。

プール取材は、これまでも首相の海外歴訪、小野田さんのルパン救出、フォード大統領、エリザベス女王の訪問などで行われて一応の成果をあげてきていて、今年もモントリオールのオリンピック取材をはじめとして行

われるであろう。

4. 機材とスタッフ

ジャパンプール取材班の持っていった機材は、後掲表のとおりである。これらの機材を選んだ理由は簡単で、カメラはリースできる台数があったのはこの機種だけで、VTRは米国の放送界でソニーが多く使われていて、実際の編集・送出に同機種のものが便利だろうという事情からであった。

こうして5社から13名の取材スタッフ(11名のカメラマン……デスクを含む……と2名の技術者)と、3名の編集担当スタッフが編成され、即刻カメラやVTRの機材調達整備を行った。こんどの取材は移動が多いことを考慮して、持っていく機材を極力、軽量にすることとし、また現地での故障修理は不可能と判断して予備部品は持って行かず、カメラ、VTRの各1台を単体予備として持っていくことにした。またVTRの搬入が取材班出発の直前だったため、テストもそこそこに、あわただしく米国に向った。

不安だったウィリアムズバーグでの3回にわたる取材と送出は、だいたいうまくいった。馬車に乗って町を散策された天皇が、まるで警備陣の輪の上に乗ったように見えた光景も、プール取材のほかにユニ取材のカメラがとった画が、日本でそれぞれ編集されて各社のニュースを飾った。

こうしてハワイまでの54項目のプール取材のうち、14項目、収録時間240分あまりにのぼるニュース取材が小型ビデオで行われた。機材のトラブルで取材や送出を中止することもなく、当初計画していたフィルムとの重複取材も、小型ビデオへの信頼が高まってからは止めてしまい、フィルムでは困難な伝送時間まぎわの取材にも威力を発揮した。ワシントンの天皇主催晩さん会、ロサンゼルス市長歓迎会、ニューヨーク、サンフラン

シスコの空港到着など、とくに雨中のサンフランシスコ空港到着の様子は、編集時間もない追い込みで未編集のまま日本に伝送して間に合わせたものである。幸いにも決定的なトラブルもなくうまくいったと思っている。ユニ取材の各社の中にはいろいろと機材のトラブルを起こしており、取材現場で涙をのんだというケースも見かけるなど、いつも黄信号状態であった。

今回、プール取材班が持っていたカメラ (FP-1600 J, 日立) は単管式で、堅牢性の点では今回のように取材地が転々としたさいの輸送時の振動やショックに対してはかなり強いことを認めた。日本を出発する前に調整をただけで、3管式のように連日の調整に四苦八苦することのなかったことは、厳しい取材スケジュールと機材を手荒く扱うケースが多いニュース取材にはむいていた。しかし、3管式とくらべて画質が劣ること、つまりカメラ単体ごとの画質、色調にばらつきがあり、複数台組合せて取材・編集するのに難があること、シェーディングが多いことなど、かなり見劣りする。開発当初にメリットとされていた小型軽量の点などは3管式でもIC化部品の小型化などで改良がすすみ、重量に差異がなくなってきた現在、どちらがニュース取材に優位かはいい切れなくなっているようである。

VTR (VO-3900 H, ソニー) の重量 16 kg は、ニュース取材用としては重過ぎる。ウィリアムズバーグで天皇の馬車といっしょに数百 m の間、この機材を抱えて駆けて取材したクルーの努力には、周囲の人たちの同情を集めていた。機動性こそニュース取材にとって重要なことで、勝手な希望をいうなら 5 kg 程度であってほしいものである。

編集装置 (VO-2950 H, ソニー)、送出用 TBC (CVS-504 A) については、トラブルも多く、モニターまで含めると一式総重量 180 kg もあり、今回のように点々と移動しながら運用していく機材としては重過ぎ、移動が

大変であった。また編集は映像処理の仕上げの大事な部分であるし、フィルムで充分実績のある編集手腕がテープでもできるよう、操作のスピードアップ化が当面の課題であろう。

プール取材スタッフとしては、こんどの取材では、小型ビデオを中継の補助的手段としたり、中継ふうに使ってみる野心を持たなかった。これまでのフィルムカメラの経験を生かして、日常のテレビニュースで見なれているような映像作りを基本にした。むしろフィルムと小型ビデオとは質感がちがうし、機材の操作性に差異があって、同じにはいかないが、小型ビデオをニュース現場で使っていくのに、いろいろなやり方を試みていくステップとしては大切なことであろう。

5. 米国では 16 mm に追いつけ追いこせ

いま米国では3大系列とも程度はちがっても ENG 化が大きな課題となっている。くわしい事情は他にゆずるが、なかでも CBS は社運を賭けて取り組んでいるといわれている。

フィルムは最近まで“テレビニュースの血管であり、内臓である”とされ、その取材——(輸送)——現像——編集——送出のシステムがニュース部門の基幹であった。CBS をはじめ、ほかでもこうしたニュース取材システムに改革の手をくだそうとしている。それはテレビのもつすぐれた特質である速報性と臨場性を最大限に利用し、さらに小型ビデオによって機動性と経済性を目ざしたものである。

取材中、米国のスタッフと現場でいっしょになることもしばしばであったが、大都市のテレビ局ではかなり多くのニュースがまだフィルムで取材されていて、小さなローカル局のほうが ENG はすすんでいるようであった。アカイ、ソニーのカメラ・VTR システムのように、たった一人でも操作して取材できるものも使われてい

て、すでにフィルムカメラと現像機を売りとばしてしまったところもあった。

現場で印象に残ったことのひとつに、ロスアンゼルス市の市長歓迎会で、地元局が HL-33 (池上) カメラを使って取材し、VTR で収録する一方で、ちょうどニュースの時間になったとき現場に配置した FPU でそのまま中継放送もしていたことがある。小型テレビカメラが、VTR 収録も生中継も可能という機動性が、ニュースで実現されているのは興味深いことであった。米国では、こうした多重性の面が、経営からも放送現場からもいちばん重視されていて、いろいろ工夫しているようである。ちょうど日本のラジオ放送でニュースカーが自由に走りまわって、街のどこからでも容易に放送しているやり方と同じものである。こうした速報性と臨場性はテレビにとっても大きなメリットであり、従来のフィルムによる取材送出システムではできなかったことで、全然ちがったものである。

米国ですすめられている ENG——日常のテレビニュース取材をエレクトロニクスで映像化し報道することの戦略方針は、16mm フィルムが築き上げてきた実績に、いかに追いつき追いついていくかの道をとっているようである。スタッフに経験ゆたかなフィルムカメラマンの参加が求められ、これまでニュース取材に縁のなかった技術者が、ニュース現場で密接に協力するように望まれている。新しい ENG のユニオンが結成され、すぐれたニュース感覚と判断をもつスタッフに、新しい知識と経験が必要とされている。これは大変なことが起っているぞと、ひしひし時代の進みを感じさせられた。

6. 日本と米国の差異は with sound

ところで、日本と米国ではテレビニュースの作り方にだいぶちがいがある。最近では日本もニュースのワイド化——長時間の編成やキャスターの採用など (NHK の

「ニュースセンター9時」もその例である) 形式はアメリカナイズされてきているが、両者の大きな差異は、米国が現場主義を尊重するのに対して、日本はどちらかといえばスタジオ主義をとっていることであろう。

前者はニュースの発生現場でのリポートを重視して、リポーターとカメラマンが現場で共同して取材したものをフィルムで、ビデオで、中継で伝えている。ここでは with sound が決め手になっている。一方の後者は現場の画と書原稿をカメラマンと記者からそれぞれ集めて、組合せ、整理し、スタジオからアナウンサー (またはキャスター) がコメントを読みながら伝えている。カメラが with sound である必要はなく、silent のほうが限られたニュース時間内で思うような編集ができるという面が強調されさしている。こうしたちがいは、日本のテレビニュースが、米国にくらべてはるかにキメ細かい映像処理にたけている実績をつくる一因となってきた。たくさんさんのモンタージュ効果、テロップ、パターンの多使用は日本人の器用さに倍増され、アクロバットの巧みさや、魅力さえ備えている。日本の視聴者は、こうした絢爛たるテレビニュースを見なれてきたのである。

天皇がシカゴを訪問した一日を伝えた地元 CBS のニュースは (小型ビデオ取材したもの)、たった5ショットからなる持時間1分半程度のものであった。①歓迎する市民で埋まった通りを走ってくる天皇車のロングショット、②市長午さん会場内のロングショット、③午さん会で演説する天皇のショット、④バルツ農場で収穫作業でトラクターが動いているロングショット、⑤バルツ父っあんがトウモロコシを手にした天皇とならんで収穫の説明をしているショット、の5ショットであった。

もしこれが日本であつたら、めまぐるしい画の積み重ねがカメラマンにも編集者にも要求されるであろう。しかし米国の場合、テレビニュースはこの程度が普通であつて、画といっしょに収録された現場の音や声がニュー

スの興味をかきたて、また現場へ行ったりポーターの肉声がニュースへの信頼を得るような効果をあげているようである。

ここでは sound も画と同じくニュースなのである。だから米国のニュースはがいしてショットが長く、雑然としていても、生き生きとした現実感が with sound によって高められているというやりかたである。

日本ではさきに述べたように、スタジオで巧みに整理され、またその精確さによって視聴者の信頼を得てきた。しかし、あまり整理されすぎると、ニュースそのものを裏切る危険があるのではないかと疑いをもつ人がでてきた。加工に対する不信感である。生中継が伝える雑然とした事件現場の臨場感・迫真性に接したとき、人々はまるで直接に現場におつかつて体験するような驚きや喜びを感じ、事件を自分で価値判断するようになって、積極的にニュースを読みとろうとする人たちが増えている。こうした人たちには現実の切り取りが日本式のサイレント映画時代のようなモンタージュでなされるよりも、米国式の with sound である程度連続している長いショットの積み上げのほうがよいと思うようになってきた。こうしたニュースは、with sound によって可能であったのである。

日本で with sound が注目されてきたのはやっとここ数年のことで、その歩みはのろのろしたものであった。

小型カメラ、VTR の組合せならば、フィルムとはくらべものにならぬほど良質で、性能良く音を収録・再生することが可能である。これは with sound の世界にとっては願ってもない武器であり、米国のテレビニュースがフィルムからビデオテープに代っていくのにプラス面の強化になる。with sound をニュース効果のひとつ程度にしか受けとっていない従来のニュース担当者の意識

を改めないと、ただ速報性の機能のみに目がいって、ビデオ取材システム全体のメリットを避けることになりかねない危険があろう。

7. もっと軽く、もっと安定に、もっと人間的な

日本で with sound が普及しなかった他の要因に機材が重かったこともある。3.5 kg のフィルムカメラ1台かついで、ニュース現場を走りまわることではじまった日本のテレビニュースは、その身の軽さが自慢の機動力を身上にして、たくさんの映像をのみこみ、吐きだしてきた。

カメラと録音アンプ一式で 15.4 kg (オリコンカメラ) それをコードでつながれてサウンドマンと組んで仕事することが必要な with sound は、なんとカメラマンの重荷であったことか。ベトナムの戦場で、米国特派員の with sound の機材を見て、あんなもののかついでいたら逃げおくれで死んでしまう、と述懐した日本人がいるほど、彼らとの体力差は機材の重量の問題にとって深刻である。この数年、日本で with sound が使われるようになってきているのも、キャノン EE カメラが 5.8 kg のカメラと、3 kg の録音アンプに小型軽量化され、カメラマンの重荷をゆるめたおかげである。

ユーザーの立場からいうと、小型カメラと VTR で合わせて 8 kg 前後までが、1 人でかついで取材できる重量の限界であろう。この小型軽量化がニュース取材に絶対必要な機動性を付与してくれる基盤であるし、走りまわって取材しても息切れしないような重さをとというのが、ニュースの大半を占める取材現場の実態であり、ユーザーの希望である。あとは取材目的に応じて、必要な性能を備えたたくさんの機種がフィルムカメラにあるよ

うに、小型ビデオにも多少重くても三脚に固定させて取材するのに便利なものが求められるのではないだろうか。

ニュース現場はいつもホットに動いていて、カメラマンはその渦の中を動きまわりながら取材している。機材に与える振動や、衝撃のひん度とか大きさは、従来のテレビカメラが経験しなかったような勢いでおそってくるのは明白である。訪米取材中、3管式カメラがいろいろ苦労したのも、過酷な使い方に耐えるほど安定性に欠けていたためであった。現状では無理かも知れないが、取材する前にいちいち調整するのでは、調整に要するコストも高くなり、カメラマンが不安がって取材意欲を低下しかねないマイナスのほうが大きく、緊急迅速を必要とするニュース取材用としては不向きで、この面での性能向上を望んで止まない。

画質は、フィルムにくらべても劣っていて物足りないのであるが、もっと良くなることが期待されるので、新機材の登場を待ちたいと考えている。

それよりも、こんどの取材中、カメラマンをたえずなやませたのはファインダーであった。現在のものは、まだまだ不鮮明でピントがとりにくく、しかも白黒なので今後はフィルムカメラで使われている光学ファインダーなども検討していきたいものである。

フィルムカメラマンにも、ENG への動きの中で新しい知識と経験をうけいれるよう発想の転換を求められている。高度で複雑な電子機器をつかまえて“やさしく”と望むのは無理を承知で、従来のテレビカメラの概念を転換させるような、人間が使いやすい人間的な機材を、ニュース取材用に開発されることをメーカーや関係技術者の方々に望みたい。

単管カラーカメラ (FP-1600 J)

カメラ方式: 単管シングルキャリア周波数分離方式
撮像管: 1 インチフィルタ内蔵サチコン
ビューファインダー: 1.5 インチブラウン管による電子式
レンズマウント: アーリーマウント, C マウント
映像出力: NTSC 75 Ω
音声出力: -22dB 600 Ω
感度: 2000 lx F5.6
水平解像度: 240 本以上
電源: 内蔵蓄電池 (銀電池) または外部電源 +12~14 V DC
外形寸法: 201(H)×367(D)×135(W) mm (本体部)
重量: 8.2 kg (レンズ, マイク含む)

ポータブル収録 VTR (VO-3900H)

形式: ユーマチック方式 (3/4 インチ, リール平行型)
映像記録方式: 回転2ヘッド FM 記録
カラー記録方式: 副搬送波低域変換型
映像入力: VBS AGC 付 75 Ω BNC 接栓
水平解像度: 240 本
映像 S/N: 40 dB 以上
音声入力: ch-1 -70 dBm, 600 Ω , キヤノン XLR-3-32
ch-2 -70 dBm, 600 Ω , キヤノン XLR-3-32
音声出力: ライン出力 +4 dBm, 600 Ω , キヤノン XLR-3-31 (ch-1, ch-2)

FP-1600 J

- このほかに取材内容により音声機材, 三脚, バッテリーライト持参
- 予備電池, テープも常時携帯
- 取材地は, ウィリアムズバーグ, ワシントン, ニューヨーク, ロスアンゼルス, サンフランシスコ, ホノルル, ハワイ島コナ

- ウィリアムズバーグでは, 送出装置といっしょに空港事務室に設置した。
- はかの各取材地では CBS 各局および現地ローカル局内に設置した。

- ウィリアムズバーグでは, 空港事務室に設置し, 送出した。

モニター出力 0 dBs ハイインピーダンス
110 号プラグ適合
音声周波数特性: 80 Hz~10 kHz (+2・-6 dB)
音 声 S/N: 40 dB 以上
テ ー プ 速 度: 9.53 cm/sec
記 録 時 間: KCR 20 にて 20 分
連続最大使用時間: BP-20 A フル充電で 1 時間
電 源: DC 12 V, AC 100 V $\pm$ 10 V, 50/60 Hz
消 費 電 力: DC 27.6 W, AC 78 VA (AC-3100 使用時)
外 形 寸 法: 本体 380(幅) $\times$ 172(高さ) $\times$ 334(奥行) mm
AC アダプター
180(幅) $\times$ 172(高さ) $\times$ 337(奥行) mm
重 量: 約 14 kg (本体), 7 kg (AC アダプター)
T B C 接 続: CVS-504 A (ソニー 用) と接続可能
アドバンスド V シンク, カラーサブキャリヤ
(BNC 接栓)
編集送出用 VTR (VO-2950 H)
形 式: ユーマチック方式 (3/4 インチ, 2 リール平行
型)
録 画 方 式: 回転 2 ヘッド, FM 記録方式

(VO-3900H)

(VO-2950H)

カラー録画方式: 副搬送波低域変換型
映 像 入 力: VBS 75 Ω (BNC 接栓)
映 像 出 力: VBS 75 Ω (BNC 接栓)
水 平 解 像 度: カラー 250 本以上
音 声 入 力: -60 dBm, -20 dBm, +4 dBm, 600 Ω , キャ
ノン XLR-3-32(入力レベル切替 SW 付, ch-
1, ch-2 共)
音 声 出 力: ch-1, ch-2 とともに +4 dBm, -20 dBm 平衡,
キャノン XLR-3-31(出力レベル切替 SW 付)
音声周波数特性: 100~10,000 Hz $\pm$ 3 dB
音 声 S/N: 45 dB 以上
エディティングモード: アッセンブル (VIDEO+AUDIO)
インサート (VIDEO, AUDIO ch-1,
ch-2 おのおの独立に ON/OFF 可)
テ ー プ 速 度: 9.53 cm/sec
ボ ー ズ 動 作: 可能
音 声 ア フ レ コ: 可能
動 作 姿 勢: 水平
電 源: AC 100 V $\pm$ 5 V, 50/60 Hz $\pm$ 0.5%
消 費 電 力: 130 W
外 形 寸 法: 646(幅) $\times$ 224(高さ) $\times$ 500(奥行) mm
重 量: 40 kg
T B C 接 続: CVS-504 A (ソニー 用) と接続可能 (INT/EXT
切替 SW 付) アドバンスド V シンク, カラー
サブキャリヤ (BNC 接栓)

機 材 重 量 一 覧

取材系 総重量 193 kg⁽¹⁾

1. 単管カラーカメラ FP-1600J 3 式 45 kg
(カメラ用電 BOX, ケーブル・ケースなど付属品を含む)
2. ポータブル収録 VTR VO-3900H 3 式 72 kg
(内 1 台は AC パック AC-3100 ケースを含む)⁽²⁾
3. カメラ用電池 13.5 V, 5 A 銀電池 14 個 13 kg
4. " 充電器 BC-01 2 台 6 kg
5. 収録用テープ (収容ケース含) KCS-20 33 本 25 kg
6. ポータブル収録 VTR 用電池 BP-20A 7 個 9 kg
7. " 充電器 AC-3400 1 台 3 kg
8. その他, 買物カーゴ, 音声機材 (マイクなど), ケースなど 20 kg

編集・送出系 総重量 約 180 kg⁽³⁾

1. 編集・送出用 VTR VO-2950H (ケース含) 2 台 80 kg
2. 編集コントロールユニット RM-400 (ケース含) 1 台 6 kg
3. TBC CVS-504A (ケース含) 1 台 25 kg
4. カラーモニター CVM-1360 (ケース含) 2 台 46 kg
5. その他, 音声機材, 工具, ケーブル類など (ケース含) 20 kg

(注) (1) 買物カーゴとケース 9 箱に収容

(2) 充電器として使用した

(3) 7 箱に収容